

東京綺談—花の章—

TOKYO BOOKS

東京綺談—花の章— ￥ 460

0293—702602—5170

著者無検印承認

昭和四十五年八月十日印刷
昭和四十五年八月十五日発行

著作者 富田常雄

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

本社 東京都新宿区西大久保三—三六
出張所 東京都新宿区払方町一番地
振替・東京二一七五七
電話・(三〇)二二五〇

東京綺談

花の章

富田常雄

目次

無心の人	五
こおろぎ	六
欲望の花	兎
秋風に問う	五
山小路邸	九
気骨	四
崩れる	七
暮雪	四

ひょうたん池

二六

なわ

二九

華族芸者

二七

移りかわり

三〇

右京ヶ原

三三

哀別

三六

迷える羊

三六

桜さく日に

四六

装幀 中尾 進

無心の人

山王の森に帰る鳥が、おびただしく群れ啼きながら夕空を渡って行った。生れて始めての苦しみだった。

十七歳の今日まで、梨花はこんな苦しみを味わったことが無かった。みぞおちから胸元、更らに脇腹へかけての劇痛は名状すべきものがなく、彼女は気が遠くなりながらも、唇を噛み、脇腹を押えて、道端にかがみこんでいた。それでも、群れ啼く鳥が煩るさいと思う意識だけは残っていた。

虎の門へ抜けて、三田までの帰途を、この溜池の近くまでたどって来た時、彼女は急に痛みに襲われた。それが、癩というのか、どうか、その知識さえ持つてはいなかったが、少女時代には経験がなく、自分で女になったことを知った後、始めて、女だけの病気といわれる、この種の劇痛に襲われたのである。

「ううむ」

奥歯を噛むようにして呻き声をあげ、額に浮んだ脂汗を、それでも、女らしく袴の袂でぬぐった時、なんとというキッカケもなく涙が溢れて来た。

父の使いで、麴町平河町の、元同藩だった友人の家へ、父からの無心の手紙を持って行ったのだが、今は出世してしまっている相手は、にべもなく、梨花を断わった。明日の米に困るような窮状を訴えた手紙であるのを、彼女もよく知っていただけに、その落胆と悲しみは大きかった。

もとより、俵で行ける境遇ではないから、往きも帰りも、こうして、徒歩だったが、その疲労と、心の打撃が、こうした病気を起こす大きな原因でもあったろう。

素手で帰らなければならぬことや、父の落胆を思えば、足のはこびものろく、その揚句がこのよ
うな災難になったのだと思うと、誰を恨むでもない涙が流れた。

ふと、佩劍の音と、靴音とが一つになって身近かに聞えた。

「あ、お巡りさんが」

そう思い、梨花は救われた思いがした。

桃割れのほつれ毛を指先で掻きあげようとした時、軽く肩先に手が触れて、

「どうしたですか」

無愛想な言葉が頭の上でした。若い声だった。

その声に顔をあげた梨花の眼にうつったのは巡査ではなかった。

黒い軍服と、その胸に肋骨のように太く渡された飾りの紐の幾筋かで、梨花はとっさに陸軍の軍人
と判った。

言おうとして、声が出ないまま息をつめて見上げた相手は、第二種帽を、これは又、軍人らしくも
なく、こころもち、あみだにかぶった若い将校だった。

ガチャリとサーベルを鳴らして片膝をついたのは彼女の病状を案じての無意識な動作なのであ
ろう。

「痛むですか」

「は、あの…」

後は言葉にならなかつた。

相手が凍々しい容貌の、若い将校だったことに戸惑ったことも手伝っていた。

相手は梨花の様子を瞞めて、大きく一つ息をした。

「癢という奴かな」

独語のように言い、軍服のボタンをはずして上衣の内ポケットに手を入れた。

半紙が古びて性がなかったが、丸薬らしいのが包んであるのを無器用に開いて、陸軍将校は掌の上のせた。

「万金丹だ。効くか、効かないか自分で呑んだことがないから判らんが」

差し出された丸薬を手にとる気力にかけ、梨花は苦しい息の下で、

「恐れ入ります」

と、だけ言えたきりだった。

「吞ませよう、口を開け給え」

相手はこの場合、梨花が若い女性であることも忘れて、彼女の下ぶくれの顎に手をかけたが、梨花の方は劇痛に悩みながらも、そんなことをしてはならぬと言う、女の羞らいで身を悶んだ。

「開け給え」

命令するように言った若い将校は、梨花の美しくも見事に揃った白い歯並を目にした。

はしたないと思いつつも、梨花はその丸薬を含み、そのまま、又うつ向いた。

「水がなくていかんが、無いものは仕方がない、思いきって呑むんだな」

そのまま、将校は手を放して起ちあがると、立ち去るでもなく無然として四辺を見廻していた。

九月末の、やがて、野分を思わせる夕風が人家の乏しい、この辺を撫ぜるように吹き渡って行った。薬を呑んだことで、神経的に救われたのか、梨花はそのままの姿勢でいたが、どうやら、痛みが遠のいて行ったように思えた。

うつ向いたまま、将校の袖章が二本筋だったのは中尉だろう。サーベルの柄頭のところが錆びいて、靴が泥だらけだったなどと、彼女は、そんなことまで思い出すほどに痛みから解放されていた。ただ、若い彼の手で薬を口に含んだことが無性に恥かしくて、容易に顔があがらなかった。

「痛みはいいようだな」

将校は瞞めて、そう言った。それに救われたように、

「どうも、ほんとに御親切に。痛みが遠のきました。ありがとうございます」
袂で額の汗をぬぐって、梨花はそう挨拶が出来た。

「薬も時には効くとみえる、母が隠しに入れたのをそのままにしていたが、薬を信用しない口ぶりだった。」

「いえ、薬をいただいたて、ほんとに助かったような気がいたします」

「どこへ帰らるる」

「薩摩っ原まで」

「三田の」

「はい」

「それは大変だ。俵に乗られるか」

「いえ」

もとより、ここから三田までの俵賃など持ち合わせがなかった。

「色々ありがとうございます」

会釈して起ったが、又、ふらりとよろけて梨花はかがみ込んだ。全身の力が抜け、殊に、足に力が入らなかった。

「それでは、とても、三田まで歩けんなあ。僕の家へ来給え、すぐそこだ。ゆっくり休んでからでなくては無理だ。来給え。すぐ、そこだ」

聞きよるによつては、ずい分、押しつけがましい様ではあったが、その言葉のうちには真実の他には何にもなかった。

梨花には抵抗の許されない好意であった。

併し、急病を看護された上に、はしたなく又、その好意にすぎること後めたく、相手が若い軍人だけに羞恥も強かった。

「歩けるかな」

「はい」

答えたものの、よろける梨花の左手を軽く支えて、

「元氣を出して」

と、言い、白い歯を出して、にこりと笑って見せた。ここでも、この将校は梨花を女として扱ひもせず、意識もしていない様子だった。

「僕の家はすぐその福吉町だ。と言つても、実は旧藩主の須田侯爵邸の長屋だが、来給え」

「は、でも、厚かましく」

梨花は一応辞退した。

「病気には勝てん。手を放しても歩けるか」

そう言つて、彼は梨花の手を放して、その顔をのぞいた。劇痛で蒼白だった彼女の双頬がほのぼのと桜色に染まっていた。この歳まで、父以外には、男に手をひかれた記憶がないから、彼女は彼に手を取られて、すっかり、あがつていた。

「歩けます」

「そうか。そろそろ歩き給え」

「はい」

将校は夕空を仰ぎ、未だ、疇におさまらずに騒ぎたてている夕鳥を見た。

「煩るさい奴等だ。それとも、旅鳥でもないじているのか」

言いながら、鎧の減った指揮刀をがちやがちや引きずつて、梨花を労わるようにゆっくり歩いた。

人家の少ない、この辺は夕方となれば淋しく、商家が少なくて、昔通りの大名屋敷や武家屋敷が残っている。樹も多く、そのさびしさは一層だった。

相手が、一と目で知れる陸軍将校であつたからいいが、もし、下ごころのある別の人間であつたら、梨花は病気の看病にかこつけて、どんな目に会つたか知れなかつた。

黒い須田侯爵の大名門を入ると青年は梨花を右手の、二軒ならんだ長屋の玄関へ導いた。

「お母さま、ただ今帰りました」

そう言うと、彼は軍帽をぼんとぬいで、玄関の三畳の隅にぼんとあお向けに抛った。

乱暴だと思ふ間髪を入れず、にやおんと子猫らしく啼いた三毛猫が迎えに出て来たが、それが目的ではないらしく、青年の軍帽の中へ、ひらりと飛びこんで、居場所をきめるように、ぐるぐる回ってから体をおさめ、喉を鳴らした。習慣らしい。

「おや、お帰り」

黒っぽい袷に被布を着て、切り下げ髪にした老婆が、長靴をぬいでいる俵の後に起った。会釈する梨花に目礼して、

「健二郎、お客さまです」

「いやあ、客じゃない。路で見つけた病人です」

と、彼は無雑作に答えた。

「まあ、それは」

品のいい、切り下げ髪の母親はあどけないという風に梨花の様子を眺めた。

「溜池の近くで、かがんで苦るしんでいたから、お母さまが折角、内かくしに入れて下さっている万金丹をまるきり使わんと悪いと思うておった矢先じゃから、この人に吞ませた。はっはっ」

事もなげに笑い、

「さあ、上がり給え、お母さまと二人きりの家だ」

そういい、健二郎は靴を倒したまま、玄関の三畳に起った。

「それは、ご災難でした。さあ、遠慮はせずとお上りなさいまし」
訛のない素直な東京弁だった。

三毛猫は健二郎の軍帽から、ほんと飛び出し、今度は彼の足にからみ付いた。

「でも、私、もう、おかげ様ですっかり元氣になりましたから」

梨花は遠慮せずにいられたなかった。袖すり合うも他生の縁とはいえ、あつかましいと思った。

「下らん遠慮は要らん。あがつて休んだ方がいい」

健二郎は命令口調だった。

「ほんとに、遠慮はなさらずに。さ、狭いところだけれど」

母親も息子におとらず親切にいった。

「では、しばらく」

「さあ、さあ、どうぞ」

一面識もなかった親子の家に、あつかましく上り込むのは如何にも気がひけたが、相手の素朴な態度に、梨花はいつか引きこまれていた。

家は三間ほどの広さで、小さい庭がついていたが、それよりも、丘のある、この須田邸の広大さと老木の生い繁った奥深いたたずまいは、東京の赤坂とは信じ難いほどで、山奥を思わせた。

出された座布団を遠慮していると、三毛が人なつかしそうに梨花の膝へ乗って来て喉を鳴らし始めた。

健二郎はその間に、自分の部屋らしい奥に入ると、忽ち、軍服を緋の袷に着代え、白ちりめんの帯

をぐるぐる腰に巻きつけながら出て来た。

「さき程は」

改めて、片手をつくのを、

「いや、なおってよかった。お母さまの薬を使えたので、義理がすんだような感じだ」

そういつて、彼はどつかりと縁側に胡座を掻いた。

梨花は目のやり場に困った。青年将校が軍服姿の時よりも、一層に、男らしい美貌の持主なのに戸惑ったのである。

「さ、熱いお茶でも」

盆を目七分にささげた母は入って来ると、梨花に茶をすすめた。

「恐れ入ります。石原梨花と申します。あの」

健二郎をなんと呼んでいいのかに迷って、

「士官の御息にお世話になって痛みもとれました。ほんとに有難う存じます」

「お母さま、この人は三田の薩摩っ原まで帰りなざるんじやと。だが、痛みの後すぐではと思って連れて来ました」

健二郎は須田邸の高い樗の梢を見上げながらいった。梢は暮れかかる夕映えを受けていた。

「お父さんは石原東吉……。すると、直心影の剣術をやられた、あの石原先生ですか」

問われるままに、梨花が父の名前を言った時、健二郎はそう言った。

「はい警視庁の武術掛りの師範をしておりましたが、今は病気で引き籠って、子供さん達に漢字などを教えております」

「石原先生は居合拔きの名人だったな」

「そう言われておりますが」

思わず、梨花は言葉を濁した。

明治の御維新このかた、全く剣術がすたれて、食べるために、浅草の奥山へ出て、同じように生活に困っている柔術家と組んで、大道芸人と変りなく、居合拔きをやって投げ銭に甘んじた事もあるのは死んだ母から聞いて知っていた。

「直心影流の奥儀を極めた剣士が歳をとられたとは言え、漢学の先生は惜しいな」

と、健二郎は感慨をこめて言った。

「時世に取り残されたのだと思っております」

「そう、そうも言える。しかし、日本人は剣の道は生来好きなのだから、又逆戻りするかも知れない。僕のような軍人がいる限り、日本も戦争に備えているのだし、戦争は人殺しと昔から相場がきまっているから、剣の精神は二の次にして、刀を使う術には励むだろうから」

と、彼は謎のような微笑を浮べた。

梨花が僅かの時間に知ったことは、青年将校は陸軍大学出の山科健二郎中尉で、現在は参謀本部出仕であることと、福岡の須田藩士族出であることが判った。

先刻は参謀本部からの帰途であった。

この縁から見ると須田邸の櫺の梢にはえていた夕映えもうすれて、秋の、早い夜の帳が下りようとしていた。

帰ろう、帰ろうと思いつながら、梨花はなかなか座が起てなかった。それは、この、品がよくて、親切な親子にひかれたのか、健二郎の男らしさに魅力を覚えたのか、しかし、そんな事は彼女自身、思つても恥かしい原因に違ひなかつたが、暗くなつて三田まで帰る怖ろしさを、梨花はそう強く感じなかつた。

「もう、すっかり、痛みはないようですね」

健二郎の母はそう言つて、台所から戻ると、梨花の顔をさし覗いた。

「はい、おかげ様で、すっかり、いろいろ、有難う存じました。おいとまさせていただきます」

「まあ、お待ちになつて」
そう言つと、母堂はもう一度、台所へ起つて行つたが、やがて、手早く、茶の間に食事の支度をした。

「さ、お腹がおすきでしょう。お粥を煮たから、ひと口食べていらっしやい。三田までは大変ですから」

「ま、飛んでもない。そんな、厚かましいことは」

思わず、梨花は尻込みした。それでは、あまりに甘え過ぎ、あまりに厚かましいと思つたからであつた。

「袖すり合うも、なんとやら、どうぞ、昔から知つた家に來たのだと思つて、ゆつくり召し上がつて